

シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅲ〕

～デカルトの身体の感覚と身体の想像について（その2）～

村　上　吉　男

（2）補足・身体の〈想像（imagination）〉について〔続き〕

身体能力は、その〈感覚〉にあつては〈ressentir〉であり、この〈感覚する〉が前号引用文⑨の〈外的対象〉や〈身体または身体の一部〉に働きかけて生じる、同引用文⑩の〈外的感覚〉や〈内的感覚〉という各〈sens〉であつた。〈ressentir〉と〈sens〉とは、また前号で「〈腺〉という精神」での〈感覚〉なる〈sentir〉と〈sentiment〉の関係を語ったと同様な、いわば身体版の〈感覚〉の関係であることを示唆させる。だがここは身体版の〈感覚〉の関係を問題にするのではない。問題は、〈ressentir〉が〈外的対象〉や〈身体または身体の一部（たる対象）〉を〈外的sens〉や〈内的sens〉として〈感覚する〉にせよ、この〈感覚する〉に〈sentir〉と同じく、各〈sens〉の身体感覚を「そのままに受け取る」意味が付され捉えられるのか、換言すると〈感覚する〉は〈感じる〉と同じ精神的な意味を有するかということである。〈感覚する〉は身体感覚をその感覚としてしかそのままに受け取らない。〈感じる〉が身体感覚を精神の感覚として「そのままに受け取る」のと比べると、どうしても「そのままに受け取る」意味が異なるとみておかねばならない。それでも人が〈sentir〉の働きかけを〈脳の中枢部位〉たる身体〈機械運動〉としてあるといい続けるならば、〈sentir〉も〈ressentir〉に等しくなるとみなされるであろう。しかしデカルトは〈脳の中枢部位〉を同時に〈理性的精神〉であると断じていた。この一例による身体精神へのすりかえもみられればこそ、このすりかえは〈ressentir〉と〈sentir〉なる中味が同じになる意味をもたせはしないだけでなく、即精神優位をさす以外の何ものでもなくさせる。このすりかえなしに、彼は〈理性的精神〉を主張する必要がない。このすりかえがあつたため、〈理性的精神〉の〈sentir〉は身体〈ressentir〉なる能力と相違させてみるほかなかつたといえるのである。

（筆者が前者の能力を〈感じる〉と、後者の能力を〈感覚する〉と訳したのもこの相違のせいである）。

以上のことをさらに詳細かつ明確に知りたくば、〈imaginer〉を参照することが欠かせなくなるであろう。

⑬Imaginer n'est autre chose que contempler la figure ou l'image d'une chose corporelle. ⁽⁶⁵⁾

想像するということは、物的（身体的）なもののかたちや像を思い描くことにほかならない。（括弧内は筆者）

⑭Ils sont tellement accoutumés à ne rien considérer qu'en l'imaginant, qui est une façon de penser particulière pour les choses matérielles. ⁽⁶⁶⁾

彼らはもの（物的なもののかたちや像）を想像しないと—想像するということは物的なものに対する思惟（する）の固有な方法である—何も思惟しない習慣に囚われている。（括弧内は筆者）

この〈imaginer（想像する）〉は〈sentir（感じる）〉と同様に、〈理性的精神〉の〈能動〉なる一能力である。したがって前号までに触れてきた通り、その働きかけの「過程」もおおよそ〈sentir〉のそれと同じになるとみなしてよい⁽⁶⁷⁾が、しかし「〈腺〉という精神」での〈痕跡〉は〈imagination（想像）〉であり、〈想像〉が〈腺（H）〉である〈想像の座〉に見出されることが〈sentir〉と異なるところである。だがなぜ〈想像の座〉においてなのか。ここで前号引用文⑫の傍線部分㊦に立ち戻る必要がある。そこには〈この痕跡は後述のように、多くの他の原因からも生じ得る〉と記される。すると〈多くの他の原因〉は〈腺（H）〉である〈共通感覚の座〉での〈痕跡〉たる〈sentiment〉をもたらしはしないから、〈痕跡（imagination）〉は〈想像の座〉に〈帰せられる〉と捉えるほかなくなるわけである。デカルトが〈多くの他の原因〉を〈後述〉すると書くかかる〈原因〉をばのちに引用文として提示する予定でいるにせよ、〈多くの他の原因〉を契機に、それはたとえば、〈imaginer〉の働きかけよう中味が〈対象

の現前に依存)してその〈対象〉をまさに「そのままに受け取る」〈sentir〉とは当然相違させることをさすばかりか、〈imager〉と身体の〈想像(imagination)〉の中味が同じになるかどうかという、今の筆者の課題に答えを提供するはずである。

上記引用文⑬と⑭を一見して明らかなように、〈想像する〉は〈物的なもののかたちや像を思い描く〉ことにある。このことは〈想像する〉が〈対象〉を「そのままに受け取る」という〈感じる〉のかかる中味と相違させる証しである。あわせて〈物的なもののかたちや像を思い描く×想像する(imager)〉は身体の〈想像(imagination)〉の中味とも異ならせることになる。なんとすれば、既出引用文はデカルトをして、〈身体の想像は(精神が神経を介して受け入れる、顕著で明らかな原因を有する)諸知覚の影や画でしかないように思われる〉⁽⁶⁸⁾と語らしめたからである。簡単に繰返しおくと、この相違は精神の〈想像する〉と身体の〈想像〉とがそれぞれ、〈かたちや像〉と〈影や画〉であるところに見出される。そこで筆者に新たに問われるは、この精神の〈想像する〉ことよりも、まずは身体の〈想像〉に対してなのである。それは、〈身体だけを原因とする想像について〉⁽⁶⁹⁾という小見出しから予想される内容を、つまり身体には〈感覚(sens)〉のほか、この〈想像〉もあると語られる場合を踏まえども、〈影や画〉である身体の〈想像〉がいつ生じるとみればよいか質されねばならぬからである。先きの註(68)に掲げた引用文がこれに答えよう。括弧内を省いて記す引用文は、〈身体の想像は諸知覚の影や画でしかない〉である。だが〈諸知覚〉にあつては括弧内の本来個別の二つの文章が、すなわち〈精神が神経を介して受け入れる〉と〈顕著で明らかな原因を有する〉が形容される⁽⁷⁰⁾と指摘できる。これで〈諸知覚〉に、要するに〈痕跡〉に何が想定されるかがみえてくる。

前段に問う引用文中の前者の〈精神が神経を介して受け入れる〉という文章は再度いうが、〈理性的精神〉の諸能力が〈神経を介して〉、すでに〈腺(H)〉(以下〈腺〉と表記)に達していた身体の〈感覚〉や身体の〈想像〉に〈働きかける〉ことを内容にして、その獲得されし〈諸知覚(痕跡)〉にかかることを示唆する(ただしこの際、後者の文章まで条件に加えると、〈諸知覚(痕跡)〉とは〈感覚(sentiment)〉にかぎられてくる)。この〈理性的精神〉の諸能力をその一たる〈sentir〉ではなく、〈imager〉にみて当てはめ語るとどうなるか。

〈imager〉は〈腺〉である〈想像の座〉の身体の〈想像〉に働きかけて、その〈知覚（痕跡）〉を生み出すといっておく必要がある。しかしながらその〈知覚（痕跡）〉は、〈顕著で明らかな原因を有する〉という後者の文章までを条件にするのではない。なんとなればその〈知覚（痕跡）〉は〈多くの他の原因〉に〈帰せられる〉からである。前記した通り、〈顕著で明らかな原因を有する諸知覚〉とは、「〈腺〉という精神」での〈想像（imagination）〉でなしに、「〈腺〉という精神」での〈感覚（sentiment）〉たる諸〈痕跡〉に該当する。したがって〈諸知覚（痕跡）〉に形容された二文章は〈sentir〉に代表され適合される場合のみをさすわけである。〈sentir〉が〈対象〉を「そのままに受け取る」がゆえに、〈sentir〉こそ身体の〈感覚（sens）〉が〈顕著で明らかな原因を有する〉ことを含めた〈諸知覚（sentiments）〉をもたらすのである（なぜ〈諸知覚〉という具合に複数の表記となるかは、身体の〈感覚（sens）〉には〈腺〉に達しよう〈外的感覚〉や〈内的感覚〉があったと想定されるからである）。何より〈諸知覚（sentiments）〉の誕生の前提にとって、これもまた以前指摘したように、〈理性的精神〉の〈sentir〉が〈神経を介して〉、すでに〈腺〉である〈共通感覚の座〉に達していた身体の〈感覚〉に働きかけることになるはもはやいうまでもないことなのである。

以上から筆者は、〈身体の想像は諸知覚の影や画でしかない〉という前記註(68)の括弧内を取り除いた引用文に戻り、この文章中の〈諸知覚〉を〈諸感覚（sentiments）〉と置き換えて、〈諸知覚（諸感覚）〉の「〈影や画〉である身体の〈想像〉がいつ生じるとみればよいか」を検討しておきたい。そしてこの検討は前号の「(2)補足・身体の〈想像（imagination）〉について」と項目を立てた以降の二段目（あるいは引用文⑫の前の段落）で取り上げた〈ressentir〉に具体的に答えることでもあるといい得る。それゆえ上記の「身体の〈想像〉がいつ生じるか」は実は〈ressentir〉をいかに解明するかにかかってくると推察されるのである。

ところが筆者がその「(2)補足」以下の二つの段落ですでに触れたごとく、〈ressentir〉が身体の〈感覚（sens）〉と同様、身体の〈想像（imagination）〉の産出に対しても不可欠な能力として用いられてしかるべきなのに、当のデカルトは、このことをば実際に説明せずとも当然とばかりに、語らないように見受けられるのである。たとえば彼は、〈ressentir〉が確かに関係する身体の〈感覚〉

を〈外的感覚〉と〈内的感覚〉とに分けて記したと同じく、身体の〈想像〉を「外的想像」と「内的想像」とに区別して書き残したか（かかる見方が成り立つか否かは後述に譲る）。筆者は彼の諸作品を見渡しても、これが記されているとは捉え得なかった。だがそうであっても、筆者は〈ressentir〉が身体の〈想像〉にも関与されてあるとみななければ、前段での「身体の〈想像〉がいつ生じるか」、または前号の「(2)補足」以下の二段落目に述べた「これら（身体の〈感覚〉や〈想像〉）はどう見分けられるか」という問いは発せられないであろう。

それゆえ筆者は、〈ressentir〉には身体の〈感覚(sens)〉をもたらす〈ressentir〉と、身体で〈感覚(sentiment)の影や画〉なる〈想像(imagination)〉を生み出す〈ressentir〉とがある（この「ある」は、〈感覚〉をもたらす〈ressentir〉によって代表されるところでの「ある」であるし、これに〈想像〉は随伴して生み出される「ある」でもある）とみる。ただ〈感覚(sentiment)〉は精神で産出されよう〈知覚(痕跡)〉であったからして、身体にてこの〈感覚〉が生み出されるわけでないことに注意せずにおれない。要は精神用の〈感覚〉として成立するやもしれぬなかで、身体でいまだその〈影や画〉となっている能力が、身体の〈想像〉であると理解する必要がある。かつここでの身体の〈感覚〉と身体の〈想像〉はそれぞれ、〈外的感覚器官〉や〈身体または身体の一部(要するに「内臓」)〉において生じることを、しかも精神の〈能動〉たる〈sentir(感じる)〉と〈imaginer(想像する)〉に対応し、この精神の各能力を〈腺〉で関連させることを前提にしている。その際〈ressentir〉は繰返しになるが、身体の〈感覚〉や〈想像〉の両方の産出にあって働きかける能力であり、いずれも〈感覚する〉という訳語におさめ得るといつてかまわない。つまり一回の〈ressentir〉の働きかけによって、それは〈sens〉ときには〈sentimentの影や画〉も生じさせる能力になり得るということである。なんとすれば、筆者にとっては一回の〈ressentir〉によりもたらされるとみてよい、〈感覚の影や画〉なる身体の〈想像〉は、精神で〈諸知覚〉すなわち〈諸感覚(sentiments)〉が生み出されるほか、その〈諸感覚〉に付随し関係する〈影や画〉でしかないと捉えられるからである。だから身体の〈想像〉に対する〈ressentir〉のことはデカルトにとって、さほど明記せずすませられたといい得よう。肝心なことはかかる〈影や画〉が〈諸感覚〉のみから生み出されるということである。

それゆえ筆者はまた、身体におけるこの〈ressentir〉に、〈想像する〉という

訳語を当てたり、さらに精神の〈能動〉たる〈sentir〉や〈imager〉の両方を直接かかわらせたり（前者は〈sens〉に、後者は〈sentimentの影や画〉に関与する）、これらの精神の能力の意味をば共有させたりする必要はないと結語する。再度指摘せざるを得ないが、〈ressentir〉は〈感覚する〉という〈機械運動〉であるに反し、かかる〈sentir〉や〈imager〉は引用文⑭からも推察される通り、それぞれ〈物的（身体的）なものに対する思惟の固有な方法〉に従う能力であり、実際には〈感じると思う〉や〈想像すると思う〉としてよい能力なのである。これらの能力の意味がそのうえ〈ressentir〉に転用付与されると、この身体の能力はあたかも精神の能力に化してしまうからであり、また筆者にとって〈ressentir〉が〈感覚する〉だけの訳語でこと足るのに、あえて〈想像する〉との訳語をそこに付するのは混乱をまねくとみえるからである。〈感覚する〉という訳語で十分なのは、何より〈ressentir〉が身体の〈想像〉にとっても〈感覚（sentiment）〉に関連しよう、いわば仲間うちの語として捉えられるからにほかならない。

すると当然、〈ressentir〉やこれが働きかけて獲得される身体の〈感覚（sens）〉と〈sentir〉やこれが働きかけて獲得される精神の〈感覚（sentiment）〉とがおのおの、各語の違いを含めて相違するとみたのと同様に、身体の〈ressentir〉やその身体の〈想像（imagination）〉と精神の〈imager〉やその精神の〈想像（imagination）〉とは相違するといわずにおれなくなるわけである。精神すなわち〈腺〉において、〈感じると思う〉を例にしての〈sentir〉がそこに〈能動〉として働きかけ生み出すのは〈sentiment〉たる能力なのであって、〈sens〉ではない。ただし何度も強調するごとく、筆者は〈sens〉と〈sentiment〉はまったく無関係であり得ない、つまり〈sens〉は〈sentiment〉のあらわそう性質からはみ出るのではないということである。たとえば〈外的感覚（sentiment）〉たる〈色〉や〈内的感覚（sentiment）〉たる〈飢え〉はおのおの、それ以前にまず〈外的感覚（sens）〉たる〈色〉や〈内的感覚（sens）〉たる〈飢え〉をして、身体として捉えられる〈腺〉に到達せしめることを条件にし、これを踏まえて精神の〈sentir〉が身体としての〈腺〉におけるその〈色〉や〈飢え〉に対し「そのままに受け取る」ように働きかける結果、今度は〈腺〉が精神としての〈腺〉に「すりかえ」られることで成り立っていなければならなかったのである。

この関係は身体と精神での〈想像〉に関する〈ressentir〉と〈imaginer〉にも当てはまり得るといえる（ただ以下では、身体と精神の各〈想像〉に「外的想像」や「内的想像」がみられるという区別や予想をせずに語らねばならない）。なんとなれば、この〈ressentir〉は身体にあって、前記していた〈sentimentの影や画〉を〈感覚する〉のであり、その〈影や画〉（これが身体の〈想像〉である）を〈神経を介して〉まずは脳なる身体としての〈腺〉に運ぶ〈機械運動〉さえ担うからである（ここで身体としての〈腺〉といったのは、〈ressentir〉が身体能力がゆえに、これと〈腺〉とをばいわば同じ土俵にのせてみる必要があるからである）。かつその〈腺〉に〈sentir〉ではなく、〈imaginer〉がさらに働きかける場合は、〈imaginer〉が引用文⑬に〈物体的（身体的）なもののかたちや像を思い描く〉と記されるように、今度は精神の能力が関与するがゆえに、精神としての〈腺〉において、およそ〈影〉を〈かたち（または像）〉に、あるいは〈画〉を〈像（またはかたち）〉にまで〈想像する〉し、その〈腺〉すなわち精神の各〈imagination〉の産出につながるといえるわけである。（またここで、この〈腺〉すなわち精神における〈imagination〉は、筆者の名付ける、一にかかる〈かたちや像を思い描く〉いた能力をして語らせる「たんなる想像」（一般にいう想像）に、一にデカルトが記す〈l'entendement aidé de l'imagination（想像に手助けされる悟性）〉⁽⁷¹⁾をば〈想像〉の側からみていい得よう「悟性を手助けする想像（これは想像が悟性にかかわること、換言すると悟性が即想像に働きかけることを含意させる）」に、そして一に既出引用文⁽⁷²⁾にて〈一般的な意味〉としての〈情念〉をさすところに関連し語られる「情念になる想像」にもなることを付しておく。このように命名されてよい〈想像〉が彼に用意されていることは、本文のちに提示する引用文⑯を一見すれば明らかになるはずである）。

それはともかく、先きの問いである、身体の〈感覚（sens）〉と〈想像（imagination）〉は「どう見分けられるか」、あわせて精神の〈感覚（sentiment）〉と〈想像（imagination）〉は〈腺〉の場合、「どう見分けられるか」、以下に語ることをもって、その決着をつけることができよう。まず前者についてである。身体の〈感覚〉と〈想像〉はおのおの、同じ〈ressentir〉の一回の働きかけをして〈sens〉（たとえば〈色〉や〈飢え〉）を、〈sentimentの影や画〉（たとえば「外的想像」があるとして〈色〉の〈影や画〉、また「内的想像」があるとして〈飢

え)の〈影や画〉)を産出たらしめる違いによって区別される(〈sens)か〈sentimentの影や画〉のいずれがときに産出するかは後述するが、一早い〈sentir〉や〈imaginer〉の働きかけによるとみる)。だから〈外的対象〉、〈身体または身体の一部〉や〈物的なもの〉から産出される上記の各能力は同じ〈感覚する〉能力に起因して「感覚」に相即不離のかかわりに帰するしかなくなるにせよ、また他方でその〈sens)と〈sentimentの影や画〉たる各能力は実際〈感覚(sens)〉と〈想像(imagination)〉のごとき異なる名称で呼ばれ、異なる能力になると捉えられども、それでもそうした区別をつけるのはもはや〈ressentir〉以外にないと指摘できるやもしれないのである。〈ressentir〉は身体の〈感覚〉や〈想像〉の誕生にあって、確かに〈外的対象〉、〈身体または身体の一部〉や〈物的なもの〉に対し〈外的感覚器官〉や「内臓」で働きかける能力であるし、さらに各器官で「〈ressentir〉の〈sens)化」や「〈ressentir〉の〈sentimentの影や画〉化」した能力のそれぞれを、身体としての〈腺〉である〈共通感覚の座〉や〈想像の座〉に送り込む能力でもあるとみることができよう。しかしながら〈ressentir〉それ自身が本当に、これらを区別するよう選択し、決定し得るのかである。筆者はこのような選択権または決定権は〈ressentir〉にはないと断じたい。繰返すが、身体のあらゆる能力は〈機械運動〉に終始する。〈機械運動〉がどうして〈ressentir〉をはじめとする身体の〈sens)や〈sentimentの影や画〉たる能力をば「区別する選択権や決定権」を有し得るのか、有しないのである。だからデカルトが、たとえば〈sens)に対する〈sentimentの影や画〉が同じ〈ressentir〉の働きかけで、〈外的感覚器官〉や「内臓」にて端から、身体の〈感覚〉でなしに、身体の〈想像〉であるといったのは何ゆえなのかが、またこの〈sens)や〈sentimentの影や画〉がそもそもそうみられるのはなぜかが、かつまたこれらの能力がおのおの〈共通感覚の座〉や〈想像の座〉に達するのはなぜかが、〈ressentir〉を中心に語る段階では今一つはっきりしないにしろ、それでもこれ以上、〈ressentir〉が「区別する選択権や決定権」を有するようみてはならないということである(なお本文のちに身体には〈感覚〉のほか、〈想像〉もなければならぬことが確かめられる)。

そして精神の〈感覚(sentiment)〉と〈想像(imagination)〉は〈腺〉の場合、「どう見分けられるか」という後者についてである。これらはそれぞれ、〈腺〉に達した身体の〈sens)と〈imagination(〈sentimentの影や画〉)〉に対し、〈理

性的精神)の〈sentir〉や〈imager〉の各働きかけが対応して生じたとし、その生じる中味とはおよそ、前者〈sentir〉の働きかけで〈痕跡が対象の現前に依存する〉ことに、つまり〈対象〉を「そのままに受け取る」ことに、後者〈imager〉の働きかけで(これを前者に真似た言い方によると)「〈痕跡が対象の現前に依存する〉以外」のことに、つまり「〈対象〉を「そのままに受け取り得ない」ことに値していた。かかる違いこそ精神における〈感覚〉や〈想像〉の各能力なる区別を浮かび上がらせるといえよう。それに前記もした通り、この各能力が一方の〈感覚〉をして〈腺〉である〈共通感覚の座〉に、他方の〈想像〉をして〈腺〉である〈想像の座〉に見出せるようになることは、これ以前に〈sentir〉が〈共通感覚の座〉に、〈imager〉が〈想像の座〉に働きかけたことを示すがゆえに(両方の能力が同時に働きかけることは意味させない)、そこではじめて精神における〈感覚〉と〈想像〉たる能力に分かれると指摘できるばかりか、それぞれが身体の〈感覚〉や〈想像〉に関係していると読み取る必要がある(デカルトがたとえば〈想像の座〉を設定したのは、そこに少なからず身体の〈想像〉があることを見出していたからにはかならない)。

そして今度はさらに、身体の〈想像〉と精神の〈想像〉の場合を例にして、これらが「どう見分けられるか」をまとめておこう。それは何より、〈imager〉が働きかけたときに精神としての〈腺〉になる〈想像の座〉で、〈物的なもののかたちや像を思い描いて、その「〈痕跡が対象の現前に依存する〉以外」の〈imagination〉をもたらすこの〈imager〉が、実際かかる〈想像の座〉に達した、〈ressentir〉による、身体の〈感覚(sens)〉でなしに、およそこの〈感覚〉と密で〈sentimentの影や画〉となる身体の〈想像(imagination)〉に直接かわらねばならないということにあった(「精神としての〈腺〉」という表記は、精神の能力〈imager〉が身体の〈想像〉に働きかけはじめることで、身体の〈想像〉の流れる部位すなわち〈腺〉である〈想像の座〉が精神として捉え直される(すりかえられる)ことを前提にしている)。このかわりが、当然のことだが、〈imager〉が働きかけていることを、あるいは身体の〈想像〉と精神の〈想像〉が強く関係することを明らかにさせると繰返しておく。だから身体の〈想像〉と精神の〈想像〉との違いは上記の説明からも、〈ressentir〉と〈imager〉の語るところにあるとして見分けられるにせよ、しかし各働きかけがなくば、もとより身体の〈想像〉と精神の〈想像〉は、かつこれらの関係は成り立って

はこないであろう。このことはまた、〈sentir〉でも、これが〈腺〉である〈共通感覚の座〉に達していた身体の〈感覚(sens)〉に働きかけて、精神の〈感覚(sentiment)〉を生み出すとみなされることで、その過程が〈imager〉の場合に類似させて述べられるのだから、この働きかけをなす〈sentir〉や〈imager〉のそれぞれ以外に、もはや身体の〈感覚(sens)〉と精神の〈感覚(sentiment)〉との、あるいは身体の〈想像(imagination)〉と精神の〈想像(imagination)〉との各関係を「区別する選択権や決定権」がないといって間違いではなくなる。

しかしながら、〈sentir〉や〈imager〉がおのおの、なぜ〈腺〉である〈共通感覚の座〉や〈想像の座〉に働きかけ得るか、別言するとこの結果各〈座〉での〈痕跡〉は何ゆえ〈sentiment〉や〈imagination〉として理解されるのか、ここでは別角度から確認しておく必要に迫られる。このように相違するとみなす根拠は、上記のいずれのことに對しても、〈sentir〉が〈腺〉である〈共通感覚の座〉で、その〈座〉に入り込んでいた〈顕著で明らかな原因〉(身体の〈感覚〉)を受けて働きかける、筆者のいう、精神での「sentirのsentiment化」⁽⁷³⁾に、他方〈imager〉が〈腺〉である〈想像の座〉で、その〈座〉に入り込んでいた〈多くの他の原因〉(身体の〈想像〉)を受けて働きかける、これも筆者の名付ける、精神での「imagerのimagination化」⁽⁷⁴⁾にあるといえる。〈顕著で明らかな原因〉は〈共通感覚の座〉であられるために、〈sentir〉はこの〈座〉とかわるし、〈多くの他の原因〉は〈想像の座〉であられるために、〈imager〉はこの〈座〉とかわる必要があるわけである(たとえば〈sentir〉はおおよそ〈想像の座〉に関係しないがゆえに、〈共通感覚の座〉と必らずかわらざるを得ないのであり、このことはのちに明らかにされる)。その各〈座〉においてはじめて、〈sentir〉は〈対象の現前に依存する〉という〈痕跡(sentiment)〉を、〈imager〉は「〈対象の現前に依存する〉以外」という〈痕跡(imagination)〉を獲得しよう。なんととなれば、〈痕跡が対象の現前に依存する〉は〈顕著で明らかな原因〉に、「〈痕跡が対象の現前に依存する〉以外」は〈多くの他の原因〉によっていなければならぬからである。そしてなかでも、「〈対象の現前に依存する〉以外」という〈痕跡〉が、つまり〈多くの他の原因〉による〈痕跡〉がみられるからこそ、筆者が前記していたような「たんなる想像」「悟性を手助けする想像」と「情念になる想像」たる複数の〈想像〉が生み出されるわけである(複数の〈想像〉の具体的な説明は次回以降に譲る)。そして以上のことがわ

けても、精神の〈感覚〉と〈想像〉が「どう見分けられるか」の最後の答えになるとしておく必要がある。

なお「複数の〈想像〉」に加えられる〈想像〉は、何も前段に記した能力だけでなく、〈孔〉での、筆者のいう、「〈受動〉としての想像」⁽⁷⁵⁾と、既出引用文⁽⁷⁶⁾に〈特殊な意味〉に限定して読み得る、もう一つの「情念になる想像」⁽⁷⁷⁾、さらには後述しよう、その〈孔〉にすら含まれないと捉えられるところでの「身体的記憶に発する想像」⁽⁷⁸⁾があることも念頭においておかねばならない。〈孔〉における上記註(75)と註(77)の二つの〈想像〉の詳細もまた次回以降で語るが、それでもここで予め注意すべきことを掲げておくと、それは既出引用文⁽⁷⁹⁾の〈身体〉の想像が生じるのは、動物精気が多様に動かされたり、脳にすでにある多様な印象の痕跡に出会ったり）するときに書かれる当の引用文とわけてもそのなかの〈動物精気が多様に動かされる〉という文章にある。

そこで筆者は上記引用文を、一に何度も主張したように、〈身体〉の想像の発生は身体能力（ressentir）を因子とした身体にあるとみるのであって、少なくともこの〈身体〉の想像が〈神経を介して〉、〈脳〉の入口で〈動物精気（血液）〉と〈混ざ〉り、その〈動物精気（血液）〉の〈多様〉な運動に伴われてはじめて生まれるのではないと、一に〈身体〉の想像が生じる〉とは、前記した通り、身体から〈神経を介し〉た〈身体〉の想像が〈脳〉に入り伝えられることで、これが〈動物精気（血液）〉と〈混ざ〉り、ときにその〈混ざ〉った〈動物精気〉が多様に動かされるならば、〈脳〉（厳密には〈脳の内表面〉すなわちそこでの〈孔〉）で〈身体〉の想像（〈受動〉としての想像）になる、まさにその保証を示唆させることであろうと、そして一にこの〈脳〉中の〈動物精気（血液）〉の流れる部位の順序にあって、〈孔〉の部位が〈腺〉の部位より前にある⁽⁸⁰⁾と指摘したがゆえに、〈多様に動かされ〉る〈動物精気（血液）〉がときに〈孔〉を通りすぎて、例の〈腺〉である〈想像の座〉に達し、そこでの〈多くの他の原因〉を惹起させる原因に、だから同時に今問うている〈孔〉における原因にもなり得ると理解する。

さらに以上から、身体の〈想像〉がかかわろう〈孔〉や、〈腺〉である〈想像の座〉においては、身体の〈感覚〉での〈孔〉や、〈腺〉である〈共通感覚の座〉の場合とは相違して、既出引用文⁽⁸¹⁾から導き出した〈動物精気の粒子〉の〈大きい、興奮する、均質でない〉や〈小さい、興奮しない、均質である〉

という影響は受けないとみる、つまりかかる影響は身体の〈感覚〉の場合だけにかぎられるのであって、身体の〈想像〉の場合に及ばないと断じておく。

ところでデカルトが上記してきた、ときに〈孔〉に、ときに〈腺〉である〈想像の座〉に達する身体の〈想像〉の特徴をば〈sentimentの影や画〉と捉えざるを得なかったのは、およそ身体の〈感覚〉である〈sens〉との違いを明確にさせるためであろうと察知される。その際彼がこの特徴をもって表現しようとした真意は奈辺にあるのかである。彼が〈sentimentの影や画〉を〈機械運動〉でしかない、〈神経を介〉する身体の〈想像〉として、あるいは身体の〈想像〉が〈混ざる〉ところの〈動物精気(血液)〉として語らせることによって、まさか〈sentimentの影や画〉という傍点箇所(=)に〈思惟〉的なものを意図させるのではあるまい。要は〈脳〉の入口までに〈神経〉と関係する身体の〈想像〉や、これが〈脳〉の入口で〈血液〉と〈混ざ〉って語られる〈動物精気〉は各それ自身で、〈sentimentの影や画〉と認める(判断する)のではあるまいということである。もしそうであれば、〈sentimentの影や画〉なる傍点箇所(=)は何か、何んとも不可思議でならないし、もしそうでなければ、これはシモーヌ・ヴェーユがいうがごとき〈難点〉であり、〈矛盾〉であろうほかない。この〈sentimentの影や画〉とされよう身体の〈想像〉は身体の〈感覚(sens)〉に似た能力か、この〈sens〉以外の能力かという表現にむしろとどめるだけでよかったのではないかと推測される。むろん〈機械運動〉である〈動物精気〉にさえ、身体の〈感覚〉と〈想像〉を「区別する選択権や決定権」はない。これが〈動物精気〉にみられるとすれば、デカルトにいかなる真実(真理)を求め得るかといってよからう。

序でに、前記引用文中の〈身体の想像が生じるのは、…脳にすでにある多様な印象の痕跡に出会ったり〉するときという文章が説明されねばならない。ここではまず、〈多様な印象の痕跡(traces de diverses impressions)〉の〈impressions〉の語に留意したい。筆者がこれまで取り上げてきた諸引用文において、〈印象〉と訳したのは他にも見出される⁽⁸²⁾。そればかりではない。筆者は本稿引用文⑫の〈impressions〉を〈痕跡〉と訳しておいた。それはとどのつまり、デカルトがこの語を使い分けることを意味させ、この使い分けによって、筆者には同じ〈脳に(すでに)ある〉⁽⁸³⁾〈impressions〉であっても、〈痕跡〉の訳においては精神、〈印象〉の訳においては身体の区分けが彼に明確につけられていることを知り得

るからである。たとえ註(82)が〈感覚〉における〈受動〈passion〉〉を語るにせよ、これに〈想像〉もなうことができるのである。なぜか。この〈想像〉には何より「〈受動〉としての想像」があったし、「〈受動〉としての想像」はもとより〈孔〉に関係していたからである。〈impressions〉の一は〈孔〉に、さらには後述するように、〈脳〉に関係するがゆえに、〈印象〉の訳にしかならないといえる。また他方、〈impressions〉の一が〈腺〉に関係するとみられるとき、これは〈痕跡〉の訳でしかないのである。なんとなれば、彼は〈腺〉を精神に、〈孔〉を〈脳〉すなわち身体にみるからして、この〈impressions〉さえ、精神では〈痕跡〉、身体では〈印象〉なる訳語の各使用を余儀なくさせられるからである。彼のいう〈impressions〉にも通底しよう各使い分けから、筆者はここで、前号「(1)身体の〈感覚(sens)〉について」のなかですでに名付けた語に結語することができる。その語とは「〈腺〉という精神」であり、「〈孔〉という精神」である。それゆえ前者はそのままで通用するが、後者は以上から、もはや〈孔〉は「精神」であり得ずに、身体（「〈孔〉という身体」）といわねばならぬことになる。

次に、前段の最初に掲げた引用文は周知のように、筆者が前記した「身体的記憶」に該当してくる。「身体的記憶」が認められてよいのは繰返すまでもなく、その引用文に〈脳にすでにある多様な印象の痕跡〉と記されたからである。〈痕跡(traces)〉が〈脳にすでにある〉以上は「記憶」となり、「記憶」はこのために、〈腺〉たる精神にあるのではなく、そのうえ「〈孔〉にすら含まれない」からして、〈脳〉すなわち身体にあるとしか捉え得ないわけである。このようにみえるのは、デカルトが〈la mémoire corporelle, dont les impressions peuvent être expliquées par ces plis du cerveau (脳のひだは、身体的記憶なる諸印象の原因であり得よう)〉⁽⁸⁴⁾ といっているからである。〈脳のひだ〉は〈孔〉とも、まして〈腺〉たる精神とも異なる部位(箇所)の身体であって、そこに〈身体的記憶なる諸印象〉は刻み込まれることになるのである。

そして、なぜ〈身体の想像が生じるのは、…脳にすでにある多様な印象の痕跡に出会ったり〉するときなのかである。これは筆者のいう「身体的記憶に発する想像」を予想させ意味させるほかない文章である。「身体的記憶に発する想像」を理解するには、既出引用文が再度参照される必要がある。

⑮Et d'autant que j'aperçois beaucoup mieux ces choses-là (les couleurs, les sons, les saveurs, la douleur, et autres choses semblables) par les sens, par l'entremise desquels, et de la mémoire, elles semblent être parvenues jusqu'à mon imagination.⁽⁸⁵⁾ (括弧内は筆者)

そしてわたしはこれらのもの（色、音、味、苦しみ、他の同様なもの）を感覚によってよりよく知覚するのだから、これらのものは感覚から記憶を介して想像にまで到達されるようにみえる。

上記は身体の〈感覚 (sens)〉を例にして、〈sens〉が〈記憶〉され、しかもこの〈記憶を介して×想像〉となることを示唆しよう引用文である。だがこれは本文に記した註(79)の文章をさらに参考とするかぎり、身体の〈想像〉にも当てはまることでなければならない。〈記憶を介〉すると、身体の〈想像〉はむしろのこと、身体の〈感覚〉さえ〈mon imagination〉になることは、これを可能にさせるところが〈腺〉や〈孔〉であり得ず、少なくとも〈脳のひだ〉に関係した箇所でなければならぬことを語らせてくる。すると身体の〈感覚〉も〈想像〉も各〈腺〉や各〈孔〉に達し通るだけでなく、〈脳のひだ〉に〈記憶〉として残ったり、そのうえこの身体の〈記憶〉としての〈感覚〉や〈想像〉が各〈mon imagination〉となって生じる場合のあることが導き出される。ならば〈mon〉とは何か。註(79)の文章によると、〈動物精気が… 脳にすでにある多様な印象の痕跡に出会ったり〉するだけで、〈身体の想像が生じる〉とあるから、〈mon imagination〉は身体としての〈想像〉でしかなかろう。だから〈記憶〉も「身体的記憶」とみなされるし、〈痕跡に出会ったり〉して〈生じる×想像〉は「身体的記憶に発する想像」ということができるのである。なおデカルトが明確に「身体的記憶」と呼ぶのではないにしろ、上記と多少異なりをみせる「記憶」がある。それは、〈les idées qui ont été autrefois sur cette glande (以前腺上にあった観念)〉⁽⁸⁶⁾がこの〈腺〉から出て、〈脳のひだ〉にかたちづくる〈mémoire (記憶)〉とされるものである。筆者にすれば、その〈記憶〉も「身体的記憶」となると捉え得るが、この詳細な説明（たとえばその〈記憶〉も〈想像にまで到達される〉か否かの説明など）の試みは、筆者が「求心性」といって、身体の諸能力がいかにして脳（身体）あるいは精神に伝えられるかをみるだけにとどま

るかぎり、割愛されるほかないと断わっておく。

なおまたここで前号引用文⑫に戻り、その訳文中の最初の括弧内に記したこと、つまり「動物精気たる〈想像したり、感じたりする〉」と付したことについて答えておく。これは〈imager〉や〈sentir〉の能力がそれぞれ、〈腺〉である〈想像の座〉や〈共通感覚の座〉に働きかける（各働きかけはむろん同時になされることはない）際、身体の〈想像〉や〈感覚〉はおのおの、〈外的感覚器官〉や「内臓」（ただし身体の〈想像〉が「内臓」を出所とするともみるかどうかはのちに問う）から〈神経を介して×脳〉の入口に流れ、そこで〈動物精気（血液）〉と〈混ざ〉⁽⁸⁷⁾って、さらにこの場合は〈腺〉である各〈座〉に達すると指摘していたがゆえに、各〈座〉に働きかける〈imager〉や〈sentir〉は、各〈座〉で働きかけたならば、精神の〈想像〉や〈感覚〉を生み出さずにはおかないし、この各能力をば含有させている〈動物精気が腺Hから出る〉前に、すてにして「動物精気たる〈想像する〉や〈感じる〉」になっていると断じておかねばならなかったからである。

ここからもまた、〈理性的精神〉の〈imager〉や〈sentir〉は、各能力が〈腺〉に働きかけることで、その身体の〈想像（imagination）〉や〈感覚（sens）〉をして精神の〈想像（imagination）〉や〈感覚（sentiment）〉たらしめるのだから、かかることを「区別する選択権や決定権」を担わざるを得ないと明確にいえる。およそ身体の〈想像〉や〈感覚〉に対応して、〈imager〉や〈sentir〉が働きかけること自体すら、区別することをさすばかりか、これらが「〈腺〉という精神」にあってはその区別に従わされる〈想像〉や〈感覚〉として生み出されたとみえることは、デカルトがいう〈日常的用法〉にて、いくら「精神と身体といっしょに語らせる」にせよ、身体の諸能力のことより、精神の〈imager〉や〈sentir〉なる諸能力の方が優位に立っていることを明かさずにいないのである。この精神優位は筆者が「身体の精神へのすりかえ」とたびたび記したことでも明白であらうし、おそらく精神の〈imager〉や〈sentir〉のおのおのに、〈腺〉すなわち精神に生じる〈imagination〉や〈sentiment〉への「区別する選択権や決定権」がなくば、その〈imager〉や〈sentir〉自体が、さらに〈imagination〉や〈sentiment〉自体がたとえ〈日常的用法〉であっても、彼によって構想される必要がないし、身体の〈想像〉や〈感覚〉がそれぞれ、精神のかの〈imagination〉や〈sentiment〉の成立に関係したり、まして精神に「すりかえ」られたりされ

ることともなくなるはずである。

精神優位についてはまた、〈この痕跡は後述のように、多くの他の原因からも生じ得るのであって、そのとき...〉と記される前号のあの引用文②によって、こうも語ることができよう。ここに盛り込められる内容を再度確認しておく、それはまず、〈多くの他の原因からも生じ得る×痕跡〉は、〈顕著で明らかな原因を有する〉⁽⁸⁸⁾ 〈痕跡〉が〈sentiment〉であったのに対し、〈imagination〉でなければならないと、そして〈そのとき〉以下の文章も含めることにおいて、この〈imagination〉は〈想像する(imaginer)〉が〈多くの他の原因〉にかかわる、〈腺〉である〈想像の座〉で、すでにそこに〈多くの他の原因〉の一たる〈sentimentの影や画〉として達していた身体の〈想像〉に働きかけて生み出される能力になるということであった。すると〈多くの他の原因〉は〈腺〉である〈想像の座〉以外とは関係してこないことが、さらに〈imaginer〉が〈sentimentの影や画〉に働きかけて生じさせる「たんなる想像」をはじめとした〈imagination〉には、〈多くの他の原因〉とされる分だけ、前記したようなそれ以外の複数の〈想像(「悟性を手助けする想像」と「情念になる想像」)〉のあることが、これで明らかになるにちがいない。そこではデカルトが〈腺〉である〈想像の座〉を、〈imaginer〉をこの〈想像の座〉に送り出す〈脳の中枢部位〉をそれぞれ、〈精神〉や〈理性的精神〉という名称(用語)で語らせる以上、あるいは複数となってもたらされる〈想像〉をば身体でなく、精神の〈想像〉の能力として導き出してくる以上、これらのこと自体が、またはその〈imaginer〉の〈多くの他の原因〉への働きかけにおいて、かかる〈原因〉は〈imaginer〉によってもつくられるようにみえることが、筆者には精神を優位とする証しであると断じるほかないわけである。

デカルトが〈顕著で明らかな原因〉と〈多くの他の原因〉を提示することは、各〈原因〉を受けて、その各〈痕跡〉がそれぞれ、精神(〈腺〉)において〈sentiment〉や〈imagination〉になることのみか、さらに各〈原因〉がみられればこそ、おのおのは身体の〈感覚(sens)〉やこれを生み出す〈ressentir〉のほか、身体の〈想像(imagination)〉やこれを生み出す同じ〈ressentir〉とも無関係ではなくなることを語り得るのである。このように、身体の〈想像〉は一回の〈ressentir〉の働きかけで身体の〈感覚〉に随伴して生み出される(これが身体の〈想像〉が「いつ生じるか」の答えとなる)とみることができるし、身体の〈想像〉が

精神の〈想像〉となるかどうかは、精神の〈感覚〉を形成する〈sentir〉より一早い〈imaginer〉の働きかけが不可欠になる（これもまた精神優位を証明する）といえるのである。もとより〈動物精気〉が各〈原因〉をもたらし、それこそ原因になっていようが、それでも彼が各〈原因〉を持ち出さずにおれなかったのは、各〈原因〉がそれぞれに見合う〈共通感覚の座〉や〈想像の座〉に、ならびにこの各〈座〉に対応する身体の諸能力（〈感覚〉と〈想像〉）や各〈座〉（の身体の各能力）に働きかける精神の諸能力（〈sentir〉と〈imaginer〉）にかかわるべく設定させるためにはかならなかったと推察される。ただし彼にあって前記もしたように、「精神と身体といっしょに語らせる」（〈日常的用法〉）とはいえども、このいずれに重点がおかれたとみるかは、すでに精神優位を優先させた指摘した筆者にとって、当然精神すなわち〈腺〉である各〈座〉と各〈座〉に関与しよう〈理性的精神〉の〈sentir〉や〈imaginer〉の方にあるといわなければならなかったのである。

わけでも、この〈imaginer〉が〈想像の座〉に達した身体の〈想像〉に働きかけて生み出す（このとき〈腺〉（である〈想像の座〉）は精神にすりかえられる）精神の〈想像〉は、〈多くの他の原因〉のもとにかたちづくられていたからして、「〈痕跡が対象の現前に依存する〉以外」の、つまり「〈痕跡が対象の現前に依存〉」しない能力となる。要は「〈痕跡が対象の現前に依存〉しない」のは、または〈対象〉を「そのままに受け取り得ないのは、〈多くの他の原因〉によるというわけである（〈imaginer〉の方はだから、〈多くの他の原因〉と関連したその働きかけにおいて、むしろかかる〈原因〉を拵えさえする能力になっていよう）。〈対象〉を「そのままに受け取り得ない」ことは、一方でいうところの、身体の〈感覚（sens）〉である〈対象（〈物的なもの〉）〉を「そのままに受け取る」〈sentir〉とは異なって、〈imaginer〉が引用文⑬に記されてあるように、〈物的なもののかたちや像を思い描く〉役割をもつことを示唆させる（この場合の精神の〈想像〉は「たんなる想像」となる）。それと筆者が前段で、この〈多くの他の原因〉をもたらし原因となるのが〈動物精気〉であると述べたが、ここではなぜそういえるかが語られなくてはならない。この身体の〈想像〉にあって、前記の通り、これが身体から〈神経を介して×脳〉に入り、そこで〈動物精気（血液）〉と〈混ざ〉って、〈孔〉それから〈腺〉に向かう際、まずは〈孔〉にて、〈神経〉からの〈物的なもの〉が〈動物精気（血液）〉に流

れ込むためであろうか、その身体の〈想像〉と〈混ざ〉った〈動物精気が多様に動かされ〉るそうである。それゆえ〈孔〉における身体の〈想像〉さえ「〈痕跡が対象の現前に依存する〉以外」にかかわろう何ものでもなくなるわけである（この詳細は次回以降に「〈受動〉としての想像」と題して語る予定である）。〈動物精気が多様に動かされ〉ることはまた、およそ〈腺〉である〈想像の座〉における〈多くの他の原因〉をつくり出す原因にすらなつたと解答しておくことができよう。しかし〈多くの他の原因〉とはそれだけのことしか含意されていないのであろうか。たとえば先きに精神の〈想像〉の一として「たんなる想像」が取り上げられたが、これは「たんなる想像」を生み出すそれ用の〈imager〉の働きかけがあつたからにはほかならないならば、かえって〈多くの他の原因〉が生まれるは、この〈imager〉を原因にするといつてよいのではなからうか（のちに提示しよう引用文⑯で、それは確かめられる）。すると「たんなる想像」の誕生に不可欠な〈sentimentの影や画〉としての身体の〈想像〉が身体にないとはもはやいえなくなってくる。

身体の〈想像〉が身体にみられることは、この能力を生み出す〈ressentir〉も当然あるということである。したがって〈ressentir〉は〈感覚する〉と訳されるにしろ、身体の〈感覚〉や〈想像〉を同じ能力としてもたつたのではないし、そのどちらかを生み出すために働きかけるのではない。身体の〈感覚〉や〈想像〉が同じ能力とみなされるならば、デカルトは身体の両能力を打ち立てる必要がなく、いずれか一つを設定するだけですませられたであろう。また〈ressentir〉がたとえば身体の〈想像〉のみを生み出すというのであれば、精神としての〈共通感覚の座〉や〈sentir〉は不要となるし、精神には〈sentiment〉ではなしに、〈imagination〉しか生み出されなくなるであろう。かつまた身体の〈感覚〉や〈想像〉が身体を出所としないと語られるならば、身体と名指しされるこれらの能力をどこに求めるかばかりか、これらの能力が達する〈共通感覚の座〉や〈想像の座〉は、さらに各〈座〉に働きかけよう〈sentir〉や〈imager〉はいかなる役割を背負い得るのかという疑問を抱きかねないであろう。今問うている身体の〈想像〉のことでいうと、これが〈想像の座〉に達し、そこに〈imager〉が働きかけると捉えるのでなければ、身体の〈想像〉を精神の〈想像〉として「すりかえ」たり、心身合一を容認できたりすることは不可能になるであろう（心身合一については、とくにこれが成立するかどうかの結語は次

回以降に譲る)。

また身体の〈想像〉や〈感覚〉が〈想像の座〉や〈共通感覚の座〉なる各名称の部位に選別されるのが何ゆえかは、それがこの各能力を各〈座〉に当然対応させることにあるほか、各〈座〉に〈imager〉や〈sentir〉が働きかけるには、各〈座〉と各〈座〉に達する身体の〈想像〉や〈感覚〉の両方がなければならぬというわけである。だが身体にこの両方の能力があるとみられる場合でも、たとえば身体の〈想像〉が〈顕著で明らかな原因〉を有した〈共通感覚の座〉に、あるいは身体の〈感覚〉が〈多くの他の原因〉を有した〈想像の座〉に達するかのような交叉する流れはないと、さらに上記の一能力が二つの〈原因〉(すなわち二つの〈座〉)にかかわる流れはないとみる。この「交叉」のあることがデカルトに認められるとなると、筆者が少なくとも〈imager〉や〈sentir〉に「区別する選択権や決定権」を与えた前提が崩壊しようし、このことは彼の主張に整合性がみられない「難点」をば生じさせることになるであろう。彼のこの主張に整合性が見出せるといい得るとき、これこそ〈日常的用法〉にあっても、身体でなしに、精神が優位であることを確証させる何ものでもなくなろう。とすれば、身体の〈想像〉が〈想像の座〉に達し、〈imager〉の働きかけを受けることは、身体の〈感覚〉が〈共通感覚の座〉に達し、〈sentir〉の働きかけを受けるのと同様に、そこでは身体の〈感覚〉が対応しよう〈座〉と〈理性的精神〉の能力の名称とは異なっているといえども、ほぼ同じ過程をたどるしかなかろうということである。

だから身体の諸能力の上記のような配置は、〈理性的精神〉の〈imager〉や〈sentir〉によって、いわば適材適所になされたというほかない。その〈imager〉や〈sentir〉はそれぞれ、〈脳の中枢部位(理性的精神)〉と〈腺(精神)〉の間の〈神経を介して〉⁽⁸⁹⁾働きかけるとあることから、当初より〈動物精気(血液)〉でなくして、〈神経〉にかかわってある能力とみることができるし、おのおのが〈腺〉に関係して、この精神の〈imagination〉や〈sentiment〉をもたらずところでは身体の各能力と〈混ざる〉わけだから、当然〈動物精気(血液)〉ともかわらざるを得なくなる。しかし〈imager〉や〈sentir〉はそれぞれ、〈腺(である〈想像の座〉や〈共通感覚の座〉)〉にあっては、すでに〈多くの他の原因〉が影響した身体の〈想像〉に、またすでに〈顕著で明らかな原因〉が影響した身体の〈感覚〉に〈想像すると思う〉や〈感じると思う〉として働きかけるに

すぎないのである。要するに筆者がここで強調したいのは、〈imaginer〉や〈sentir〉は確かに〈理性的精神〉の能力であるといえども、この各能力を〈作為する〉ことという〈理解すると思う (concevoir)〉〈肯定すると思う (affirmer)〉や〈意志すると思う (vouloir)〉⁽⁹⁰⁾ 諸能力に等しいとみなすことはできない、別言すると〈imaginer〉や〈sentir〉は上記の各〈原因〉を有する身体の〈想像〉や〈感覚〉を〈想像すると思う〉や〈感じると思う〉としてつくり出すのではなく、たんに「そのままに受け取り得ない」か、「そのままに受け取る」かだけの能力になるということである。

ここでその〈imaginer〉が働きかけよう身体の〈想像〉について気にかかることがあるので、それを取り上げることにしよう。デカルトは前号引用文⑩で、身体の〈感覚〉には〈外的感覚 (sens extérieurs)〉と〈内的感覚 (sens intérieurs)〉があると語っていた。しからば当の身体の〈想像〉に対し「外的想像」と「内的想像」を想定したとして何んらの支障もないはずなのである。なんとすれば、身体の〈想像〉の「求心」的過程も身体の〈感覚〉がたどる過程とほぼ同じでなければならないと、あるいは身体の〈感覚〉においては、〈ressentir〉が〈外的感覚器官〉で、たとえば既出引用文⁽⁹¹⁾に記される〈色〉(〈外的感覚〉)を、また「内臓」で、たとえば上記引用文中の〈飢え〉(〈内的感覚〉)をもたらすように、身体の〈想像〉にあってさえ、同じ〈ressentir (感覚する)〉によって「外的想像」ばかりか、「内的想像」も生み出されてこなければならぬとみていたし、みることができるからである。つまり身体の〈感覚 (sens)〉における二例から、このおのおのに相伴って身体の〈想像〉である、「外的想像」での、たとえば〈外的感覚〉の〈色〉というその〈sentiment の影や画〉が生まれるはむろんのこと、「内的想像」での、たとえば〈内的感覚〉の〈飢え〉というその〈sentiment の影や画〉も生まれることが想定されていなくてはならないということなのである。

しかし、デカルトは身体の〈想像〉をばそれとして語るだけであって、筆者は一向にそれが「外的想像」と「内的想像」とに分けられる記述に出会うことがなかったのである。記述がないことには何か理由があろうか。確かに、〈ressentir〉が〈外的感覚器官〉や「内臓」にて、〈sens〉ならびに〈sentiment の影や画〉を生じさせることで、〈sens〉が身体の〈感覚〉、〈sentiment の影や画〉が身体の〈想像〉、さらに具体的には、〈外的感覚器官〉にあって、前者では

〈外的感覚〉、後者では「外的想像」,「内臓」にあって、前者では〈内的感覚〉,後者では「内的想像」になると断じてかまわないわけである。そして先きの例ではまた、〈外的感覚器官〉での〈外的感覚〉たる〈色〉や、「外的想像」たる〈色〉というその〈sentimentの影や画〉は、かつ「内臓」での〈内的感覚〉たる〈飢え〉や、「内的想像」たる〈飢え〉というその〈sentimentの影や画〉はすべて〈ressentir〉の働きかけ、すなわち〈mouvement (運動)〉(〈機械運動〉)によって生じるとみてよいわけである。もとよりこの〈ressentir〉という〈運動〉は〈外的感覚器官〉でさえ、実際〈神経〉との関連においても、その器官内部で生じることであるから、「内臓」をも含めた器官内部での〈運動〉であるし、この〈運動〉の各異なりが〈sens〉たる〈感覚〉や〈sentimentの影や画〉たる〈想像〉として理解されるように、彼はこの各能力にかかる名称をつけたにすぎないといわねばならない。だからここから知るべきことは、〈外的感覚器官〉や「内臓」なる器官の〈運動〉が〈色〉や〈飢え〉あるいはこの各〈sentimentの影や画〉をもたらすはしようが、しかしその〈運動〉自体が当然のことながら、かかる表現を生み出してくるのではないことにある。それなら精神がかかる表現を惹起させるのか。精神がデカルトの精神をさすなら、しかりと答えるとともに、そうであればここは上記した通り、身体の〈感覚〉や〈想像〉と断じ、いわばその名付け親になったデカルト自身にみなされるというだけでよからう。それに彼が〈des mots qui ne signifient rien que par l'institution des hommes (言葉は人間の取り決めによるほか何んの意味もない)〉⁽⁹²⁾と語るならなおさらのこと、彼の精神の〈思惟 (感じる) や 〈想像する〉 以外の 〈理解する〉 〈意志する〉 などの諸能力がこの〈思惟〉中の〈思惟に相当する)〉に起因する言葉が、身体すなわち身体の〈感覚〉や〈想像〉に見出されたり、言葉自体を発生させる身体器官に求められたりすると捉えるわけにはいかない。身体は、わけでも〈sentimentの影や画〉たる〈想像〉の能力が傍点のごときその〈思惟〉的言葉を発するというならば、それは身体に精神があることを示唆させずにおかないから、〈日常的用法〉にあって「矛盾」を招来するとみるほかなくなろう。要は上記傍点の例に〈思惟〉的言葉を与えたのは誰でもない、彼だと指摘しておくことが確認されねばならない。彼は身体の〈感覚〉や〈想像〉の各名称と〈運動〉の異なりを各言葉を使用して表現するしかなかったのである。

デカルトが以上の、まずもって自然科学に忠実であろうとしたとみてよい(日

常的用法)での身体の〈感覚〉や〈想像〉にあって、しからば当時の自然科学が何かを明かすのは別にして、〈運動〉の一である身体の〈想像〉の方はその自然科学に依拠したのか、それとも〈日常的用法〉がアリストテレスを踏まえて成り立つとみる筆者にとって、身体の〈想像〉にはアリストテレスの自然科学が導入されたといえるのか⁽⁹³⁾である。ここで筆者が少なくとも、アリストテレスの指摘しよう身体(の想像)と比較せずして、デカルトの主張する身体の〈想像〉を語ることにならないのは確かである。しかしデカルトが身体の〈想像〉を身体の〈感覚〉の例のごとく、「外的想像」や「内的想像」とに分けていないことから推察すると、身体の〈想像〉のみはこうした例以外のものとし、しかもデカルトが自然科学的思惟あるいは科学哲学⁽⁹⁴⁾的思惟でより、むしろ思弁哲学に近い哲学的思惟で創案されたにちがいないと答える。このことがまさしく、長らく保留してきた、身体の〈想像〉を「外的想像」や「内的想像」とする明確な「記述がないことには何か理由があろうか」に対する答えになる、つまりデカルトのかの創案であるがゆえに、または創案の域を越えぬがために、自然科学的あるいは科学哲学的確証にまではとどかず、したがって身体の〈想像〉における「外的想像」や「内的想像」の区別をして、たんに自然科学的ならびに科学哲学的確証に基づくといっていよい、身体の〈感覚〉で指摘される〈外的感覚〉や〈内的感覚〉の表記にならわしめることを暗示させるにまかせ、かかる区別の特記のない記述にしかなりようがなかったと断じられるからである。ただ筆者には、身体の〈想像〉があるとした彼の哲学的思惟は、その記述に対し自然科学的、科学哲学的確証に至らない「不明瞭」な部分が含まれるとはいえ、独特で卓抜であったとだけはいい得るのである。

そして〈この痕跡は後述のように、多くの他の原因からも生じ得る〉と記される前号引用文⑩において、デカルトは身体の〈想像〉の〈痕跡〉が身体の〈感覚〉の〈原因〉と相違させるべく、〈多くの他の原因〉に影響されるようにあらわすわけだが、筆者は〈多くの他の原因〉を新たに彼のいう〈後述〉に従ってさがさねばならないし、この原因をば以下に掲げる引用文にしかみることができないのである。

⑩Mais si plusieurs diverses figures se trouvent tracées en ce même endroit du cerveau (endroit du cerveau vers lequel est justement penchée cette glande), presque

aussi parfaitement l'une que l'autre, ainsi qu'il arrive le plus souvent, les esprits recevront quelque chose de l'impression de chacune, et ce, plus ou moins, selon la diverse rencontre de leurs parties. Et c'est ainsi que se composent les chimères, et les hippogriffes, en l'imagination de ceux qui rêvent étant éveillés, c'est-à-dire qui laissent errer nonchalamment ça et là leur fantaisie, sans que les objets extérieurs la divertissent, ni qu'elle soit conduite par leur raison. ⁽⁹⁶⁾ (括弧内は筆者)

しかし、多数の異なった表象（かたち）が脳の同じ場所（腺がまさに傾く脳の場所）に、皆同じくらい完全に描かれてあるならば、たいてい、動物精気は各（表象（かたち）なる）印象から何かを、しかもそれらの部分との多様な出会いに応じて、多かれ少なかれ、（それら（の印象）の部分から何かを）受け取るであろう。そんなわけで、白昼夢をみている人々の想像に、すなわち彼らの空想が外的対象によって遠ざけさせられたり、理性によって導かれたりすることもなしに、彼らの空想をばあちらこちらと気ままにさまよわせておく人々の想像のなかに、キマイラやピボグリプスがかたちづくられるのである。（括弧内は筆者）

筆者が〈figures〉を〈表象〉⁽⁹⁶⁾だけではなく、括弧内に〈かたち〉の訳をあえて付さざるを得なかったのは〈figure（かたち）〉も記される本稿引用文⑬の内容がこの引用文⑬に関係するとみるからである。つまり⑬における〈かたち（や像）を思い描く〉という〈想像する（imaginer）〉が⑬を分析するうえでの前提となることを考慮せずに、⑬の〈想像〉のことは語れはしないということである。それでは⑬における〈想像〉は、〈imaginer〉が〈腺〉である〈想像の座〉に達した身体の〈想像〉に働きかけるところで生じる精神の想像、たとえば「たんなる想像」と理解されてかまわぬのか。これには否と答えるほかない。なんとなれば、デカルトが⑬で主張しよう〈想像〉は〈fantaisie（空想）〉なる想像でしかないといえるからである⁽⁹⁷⁾。それゆえ〈空想〉は筆者がこれまでに取り上げてきた〈想像〉とは別の〈想像〉になると捉えておかなければならない。別の〈想像〉は〈孔〉⁽⁹⁸⁾以外で、次いで〈腺〉⁽⁹⁹⁾以外で、または〈脳〉⁽¹⁰⁰⁾以外で、すなわち⑬の指摘のように、〈腺がまさに傾く脳の場所〉で生み出される能力である。要は、別の〈想像〉となる〈空想〉は⑬に〈腺が〉と書かれど

も、前号引用文⑩においてみると、〈精神 (âme)〉とされよう〈腺〉自体で生じる能力をさすのではないが、しかしその能力を保有する〈腺〉が、〈腺〉の周囲にあると解く〈脳場所〉に〈まさに傾く〉際に生まれる能力であるということにある。そしてデカルトは〈多数の異なった表象 (かたち)〉にかかわる〈空想〉の発生はそれぞれ、この〈腺がまさに傾く脳場所〉で〈皆同じくらい完全に描かれてある〉のを条件にしつつ、これらの〈表象〉から、換言すると〈かたち (や像) を描いた (印象) ⁽¹⁰¹⁾ から (何か) を、また〈それら (の印象) の部分〉から (何か) を、〈動物精気〉がさらに〈受け取る〉ときであると語るように読み得るのである。

筆者はそのうえ、この〈fantaisie (空想)〉が〈キマイラやピボグリプス) ⁽¹⁰²⁾ を〈かたちづく〉るし、既出引用文 ⁽¹⁰³⁾ に〈わたしがキマイラを想像する〉というからして、ここには少なくとも、〈腺〉に働きかける場合の〈想像する〉ではもはやない〈imager〉によって、とどのつまりは〈腺〉に〈imager〉が働きかけて成る〈外来観念〉でなしに、その〈空想〉をしてたとえば〈キマイラ〉たらしめる「時間 (的経過)」が〈空想〉と〈キマイラ〉間にあるなかで、〈理性的精神〉中の上記の〈imager〉が新たに〈空想〉に働きかけてもたらされる〈作為観念) ⁽¹⁰⁴⁾ によって、〈空想〉は〈キマイラやピボグリプス〉に〈かたちづくられる〉とみる。

とまれ前段での、〈動物精気〉が各〈何か〉を〈受け取る〉ところで生じる〈空想 (想像)〉は、〈腺がまさに傾く〉ときを前提にしようが、それでは〈腺〉が〈傾〉かないときはどうなのかである。このときはすでに〈腺〉と関係しただけの〈想像〉、要するに「たんなる想像」が、「悟性を手助けする想像」が、「情念になる想像」がときに〈腺〉である〈想像の座〉でつくられるだけであって、〈空想〉なる別の〈想像〉がそこに誕生するということはむろんない。さらに〈腺〉において、それぞれの〈想像〉が発生するのは、各〈想像〉が、〈顕著で明らかな原因〉を〈腺〉で有して生じようあの〈感覚〉に比べて、かかる〈原因〉ではなく、〈多くの他の原因〉をかかえ込まざるを得ないがゆえであると察知できるからである。とすれば、身体の〈sentiment の影や画〉たる〈想像〉は〈腺〉で〈多くの他の原因〉にたちはだかれ左右されるからして、「たんなる想像」「悟性を手助けする想像」「情念になる想像」という三つの〈想像〉がおのおの、〈âme (腺)〉としての〈痕跡〉でしかなくなると捉えられることに対

し、誰も異議はさしはさめないであろう。なんとなれば、デカルトは先きの引用文⑫にあって、三つの〈この痕跡は後述のように、多くの他の原因から生じる〉と強調していたからである。

そこで懸案にしていたこの〈多くの他の原因〉はいったい、どこに求められる、または何によって生じるとみればよいのかである。筆者はデカルトが〈後述のように〉と語るその箇所は、実にかの引用文⑬に見出されると断じておくことができる。〈後述のように〉に該当するところは、〈空想が^①外的対象によって遠ざけさせられたり、^②理性によって導かれたりすることもなしに〉という箇所である。ここでは何より、〈空想〉が傍線部分の①や②に関連せずに生み出される、別言すると〈空想〉は〈腺がまさに傾く〉際にかぎられることが明かされる。すると今問う①や②とは何か。これらは再度確認するが、〈腺〉が「傾かない」場合での〈腺〉に生じる各〈想像〉以外でないことになる。各〈想像〉は三種類であったし、これを①や②に相当させ内分けると、①が「たんなる想像」や「情念になる想像」に、②が「悟性を手助けする想像」になるといえる。そしてここにまた想起せねばならぬのは、各〈想像〉はそれこそ、〈想像する(imaginer)〉が〈腺〉における身体の〈sentimentの影や画〉たる〈想像〉に働きかける能力を含めて生じるということなのである。

以上において、〈想像〉が〈腺〉という〈精神(âme)〉にあって三つの能力にわたることは、もはや三つの〈想像〉と前号引用文⑫に記される〈多くの他の原因〉とは無関係でなくなる、すると三つの〈想像〉が打ち出されるとみるは確実であると理解しておかねばなるまい。と同時に、そこに〈imaginer〉がその三つの〈想像〉を生み出す原動力となっていることを当てはめるならば、デカルトが〈多くの他の原因〉が三つの〈想像〉の各〈痕跡〉を生み出すというは、筆者にはこの〈imaginer〉こそが〈多くの他の原因〉たり得るであろうと結語させずにおれないのである。

〈imaginer〉はなるほど、本稿引用文⑬にみられる通りの、〈物体的(身体的)なもののかたちや像を思い描く〉能力であることを基本にするほかないであろう。しかしながらまたこの〈imaginer〉から三つの〈想像〉の誕生をみるといえる以上、かかる〈思い描く〉きを可能にさせる〈imaginer〉には、身体の〈sentimentの影や画〉を、〈かたちや像〉に〈思い描く(想像する)〉すなわち「たんなる想像」にさせる〈想像する〉があるはもとよりのこと、また身体の〈sentiment

の影や画」を、ときに〈理性（悟性）〉にかかわらせる〈想像する〉すなわち「悟性を手助けする想像」にさせる〈想像する〉が、ときに〈情念〉に誘わせる〈想像する〉すなわち「情念になる想像」にさせる〈想像する〉があるといわねばならなくなるのである。

〈想像する（imaginer）〉が〈多くの他の原因〉たり得ることは、〈感覚〉においても、〈感じる（sentir）〉が〈顕著で明らかな原因〉たり得ることに通用させる必要がある。これが一方だけに語られるは「矛盾」である。そうするとこの〈想像する〉や〈感じる〉という精神の能力の方が身体の〈想像〉や〈感覚〉の能力より優先され、優位に立たざるを得ないことが証明されるわけである。なんとすれば、各〈原因〉たり得る各能力（〈想像する〉と〈感じる〉）なくば、精神（âme）としての各能力（三つの〈想像〉と「能動的 sentiment」）は誕生することがなくなるからである。

また前段のことは、デカルトが〈心身合一〉があると主張しえども、精神優位としての〈心身合一〉は果たして〈心身合一〉であるといえるのか。〈理性的精神〉と〈腺（精神）〉が強調されるなかで、各身体の能力とのかかわりを解く〈心身合一〉は、筆者のみるところ、少なからず精神側から一方的に成り立たせようとする〈心身合一〉でしかなく、かかる〈心身合一〉は筆者にとって無いに等しいと答える以外にないのである。

なおまた既出引用文⁽¹⁰⁶⁾から、〈孔〉における〈心身合一〉があると語られるにせよ、この場合の方が精神優位を一層見え見えにするだけに、この精神優位をもって〈心身合一〉が成るのかという前段と同様な疑問が提起される。つまり精神優位に立たせようとして、デカルトは名ばかりの〈受動〉たる〈imaginer〉や〈sentir〉をかかわらせる（各能力を名ばかりでも設定することは精神優位の証しである⁽¹⁰⁶⁾）内容のその引用文において、各能力（引用文は〈sentir〉を例にする）は真に身体の〈想像〉や〈感覚〉に働きかけ得るかということである。筆者は各能力はそれぞれ身体の各能力に働きかけずに、「受動としての想像」や「受動的 sentiment」が〈孔〉にもたらされてくるとみる。しかもその〈想像する〉や〈感じる〉は〈理性的精神〉の能力といえども、〈精神（âme）〉ではなく、〈脳〉の一部でしかない〈孔〉で発生するかぎり、その〈脳〉の一部における「受動としての想像」や「受動的 sentiment」に〈理性的精神〉の能力は役立ち得ないと捉えるべきである。〈孔（脳）〉はまた〈精神〉とみられないがゆえ

に、もはや〈心身合一〉があるとはいえないわけである。

〔続〕

付 記

前号引用文⑨の〈知覚はすべて、神経を介して精神にあらわれる〉は今回身体の知覚（感覚と想像）のみを糺したなかで、それでも〈孔〉の場合（身体の知覚は〈精神にあらわれ〉ない場合）があるとする、果たして〈すべて〉という表現は正確か、かつ〈孔〉の場合を含め、〈すべて〉と既出引用文⁽¹⁰⁷⁾中の〈大部分〉との関係は何か、次号以降で精神の知覚を分析する際の課題となる。また今回で〈心身合一〉への見方は最終結論に達したと断じられるが、〈腺〉での〈心身合一〉の不成立の一根拠に、とくに〈imaginer〉が身体の想像〈sentimentの影や画〉を〈かたちや像〉に変化させること（精神優位の証し）が取り上げられようし、その辺も次号以降にて明確にするつもりである。

註

今回の参考文献は以下の通りであり、各註はその文献に付した記号A.-C.に従う。

A. René DESCARTES(ŒUVRES LETTRES)Bibliothèque de la Pléiade. Gallimard.

① 〈TRAITÉ DE L'HOMME〉

② 〈DISCOURS DE LA MÉTHODE〉

③ 〈MÉDITATIONS〉

④ 〈LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE〉

⑤ 〈LES PASSIONS DE L'ÂME〉

⑥ 〈LETTRES CHOISIES〉

B. ADAM & TANNERY 〈ŒUVRES DE DESCARTES -LE MONDE-〉 Librairie philosophique J. VRIN.

C. 新潟大学人文学部人文科学研究

① 「なぜ感受性なのか」(2), 第93輯, 1997年。

- ㊤ 同上 (3), 第94輯, 1997年。
- ㊦ 同上 (4), 第95輯, 1998年。
- ㊨ 『デカルトにおける理性と感覚』(4), 第101輯, 1999年。
- ㊩ 同上 (5), 第103輯, 2000年。
- ㊫ 『シモーヌ・ヴェーユとデカルト』[I], 第104輯, 2000年。

なお、以下の註の番号が(65)からはじまるのは、本稿が前号「シモーヌ・ヴェーユとデカルト [II] ～デカルトの身体の感覚と身体の想像について (その1)～」の脱稿と同時に書かれたものであるからである。

- (65) A.㊦P.P.277-278参照。またはC.㊩引用文㊫㊬P.P.56-57参照。㊫㊬ではA.㊦の〈la figure ou l'image d'une chose corporelle〉を〈身体的なものの表象〉と訳しておいたが、今回は次の引用文㊫㊬との関係で、〈la figure〉を〈かたち〉、〈l'image〉を〈像〉と訳し直した。またその㊫㊬との関係で、〈chose corporelle (身体的なもの)〉を〈物的なもの〉と訳しておく。筆者には身体的でも、物体 (物質) 的でも同じことが意味される。
- (66) A.㊤P.151参照。
- (67) 〈能動〉たる〈感じる (sentir)〉の場合、これは〈感じる〉が〈腺〉における〈共通感覚の座〉に達した〈外的感覚〉や〈内的感覚〉なる身体の各〈感覚 (sens)〉に働きかけて、〈対象の現前に依存する×痕跡〉を生み出す過程にあることをさすが、〈能動〉たる〈想像する (imaginer)〉もこれと同じ過程を有するとみることができる。ただし〈能動〉たる〈想像する〉は、身体の〈想像 (imagination)〉が〈腺〉における〈想像の座〉に達したうえで働きかけ得ることを、かつ〈対象の現前に依存〉しない〈痕跡〉をもたらしことを予め知っておくべきである。本文で以上のことを詳述する。
- (68) C.㊩引用文㊫㊬P.68参照。ただし本文引用文中の括弧内の文章はA.㊩P.706 (ART21) における訳文同㊫㊬を参考にしてまとめたものとなる。
- (69) C.㊩P.73参照。これは本文に記した通り、A.㊩P.706 (ART21) の表題である (またC.㊤P.69も参照)。
- (70) 二つの文章はC.㊩引用文㊫㊬P.67を参考に行っている。それゆえ前者の文章中の〈精神〉が後者の文章の主語となることはない。この〈精神〉は本文に前記したように、〈理性的精神〉である。もし〈精神〉を後者の文章の主語にしておくのであれば、その〈精神〉は「〈腺〉という精神」になるほかなくなるで

あろう。

- (71) A.㊦《LETTRES~A ÉLISABETH, 28 juin 1643》P.1158参照。
- (72) C.㊦引用文㊦㊦P.71参照。
- (73) C.㊦P.54参照。
- (74) C.㊦P.74（この頁（下から三行目）に記される字句は本稿本文の表現にはなっていないが、それでも同じ内容を保有している）。
- (75) C.㊦P.55やP.57参照。
- (76) C.㊦引用文㊦㊦P.71参照。
- (77) C.㊦P.75参照。
- (78) C.㊦P.55参照（この頁の二箇所に「身体的記憶という〈想像〉」なる語句があるが、この語句が本稿本文の「身体的記憶に発する〈想像〉」に該当する。）
- (79) C.㊦引用文㊦㊦P.58参照。
- (80) C.㊦P.61（上から二行目まで）参照。
- (81) C.㊦引用文㊦P.19参照。また同P.P.19-24参照。
- (82) C.㊦引用文㊦P.10参照。
- (83) 〈脳に（すでに）ある〉という表現のうち、〈脳にある〉はC.㊦引用文㊦P.10、〈脳にすでにある〉はC.㊦引用文㊦㊦P.58参照。ただし「同じ〈脳に（すでに）ある〉」と記したのは、本文以下の記述の通り、同じ脳であっても、デカルトはその脳をときに精神、ときに身体とみなしていることを示唆するからにほかならない。
- (84) A.㊦《LETTRES~A MERSENNE, 6 août 1640》P.1083参照。
- (85) A.㊦P.320参照。またはC.㊦引用文㊦P.35参照。
- (86) A.㊦P.852参照。
- (87) C.㊦P.21参照。
- (88) C.㊦引用文㊦㊦と㊦㊦P.P.67-68参照。
- (89) C.㊦引用文㊦㊦P.67参照。
- (90) C.㊦引用文㊦㊦㊦㊦と㊦㊦P.P.1-2参照。
- (91) C.㊦引用文㊦P.10参照。
- (92) B.P.4参照。
- (93) 筆者はこの拙論の副題にみられるように、「デカルトにおける科学」とはシモーヌ・ヴェーユにあっていかに捉えられているかを問う際、当時のスコラ学派（アリストテレス）の、またガリレオ・ガリレイをはじめとする自然科学について語っておく必要があると考えている。これは後日の検討課題である。

- (94) デカルトが身体の〈感覚〉に対しては、自然科学（自然が実験によって数量化され、統計的に究明されること）的ないしは科学哲学（科学的知見に基づいた哲学）の姿勢にて、明確に〈外的感覚（sens）〉と〈内的感覚（sens）〉とに区別し得たところから、彼を自然科学者とみるだけでなく、科学哲学者と、少なくともそのさきがけをなしてもいるといえるであろう。しかし身体の〈想像〉の区別については、本文に記しておくように、思弁哲学（自然科学的方法によって立つのでなく、デカルトの精神（脳または頭）のなかだけで論理的に思想を組み立てようとする哲学）に近い思惟から生み出されたにすぎないのではなかろうか（なぜかは本文後述参照）。
- (95) A.㊦P.859参照。訳文中の〈脳の同じ場所〉とした箇所に括弧を付したが、この語句は引用した文章の前段にあるものである。
- (96) たとえばC.㊥引用文㊶P.68における〈figures〉には〈表象〉なる訳語が当てられる。
- (97) 本文引用文㊸にはこの〈fantaisie（空想）〉が、C.㊦引用文㊸㊶P.56には〈illusions（幻想）〉や〈rêveries（夢想）〉の語が散見するが、これらは同じ特徴を有すると見定め得るか。訳語面からはおよそ同意語と捉えられなくもないが、〈fantaisie〉はデカルトの用語にあって、本文のちに記す通り、〈illusions〉や〈rêveries〉と異なって使われる（後者二つの語はC.㊦P.65-66参照。これらは〈孔〉に関連する（A.㊦P.706（ART21）参照）と読んだ）。このように前者と後者二つの語が異なる能力の意味を有していないというならば、彼がこれらの能力で述べることは「矛盾」をきたすであろう。
- (98) 身体の〈想像〉が〈孔〉とかかわる場合、〈孔〉では一に「受動としての想像」、一に〈特殊な意味〉としての〈情念〉をさすところに関与し語られる「情念になる想像」、そして一に上記註(97)に触れた〈幻想〉や〈夢想〉が生み出されたと整理し得る。さらにこの際、身体の〈感覚〉のことを含め、その〈孔〉に関係する注意点をまとめておけば、以下の通りになろう。まず身体の〈想像〉や〈感覚〉がそれぞれ通る〈孔〉は同じ〈孔〉であるとみてよい。それはこの各能力が同時に〈孔〉を通ることはないからである。要するにそこに「時間（的経過）」を当てるなら、いずれかが同じ〈孔〉を通過したとて、何ら不都合はないはずである。次に〈孔〉での〈理性的精神〉の〈imager〉や〈sentir〉は「受動としての想像」や前記「受動的sentiment」の産出に対し、働きかけることを実現さす助けにならないと知っておくべきである。なぜかは〈孔〉は〈理性的精神〉を出所とする〈神経に依存しない〉（C.㊦引用文㊸㊶P.5-6参照）

(たとえ〈理性的精神〉と〈孔〉の間が〈神経〉とつながっていても)からである。そして〈脳〉への入口以降において、かつ〈腺〉に達しよう以前において、身体の〈想像〉の方は〈動物精気が多様に動かされた〉り(C.㊦引用文㊧④P.58参照),あるいは身体の〈感覚〉の方は〈動物精気の粒子が大きかったり,興奮したり,均質でなかった〉り(C.㊦引用文㊧⑧P.19参照)して〈孔〉に関係し〈孔〉を通らねばならなくなるということである。

(99) 身体の〈想像〉が〈腺〉とかかわる場合、繰返してでもいうが、〈腺〉では一に「たんなる想像」、一に「悟性を手助けする想像」、そして一に〈一般的な意味〉としての〈情念〉をさすところに関与し語られる「情念になる想像」(A.㊦P.706 (ART21) 参照)が生み出されていたとまとめおくことができる。

(100) C.㊦引用文㊧④P.58中に〈動物精気が... 脳にすでにある多様な印象の痕跡に出会ったり〉とあるところから、〈脳〉に関連しよう「身体的記憶に発する想像」が生み出されていたとまとめおくことができる(本文参照)。

(101) 〈脳〈の場所〉〉(上記註(100)の〈脳〉とは別とみる)に関連するからして、〈impression〉の訳は〈痕跡〉ではなく、〈印象〉となる(前号註(48), またとくに本稿註(83)周辺の本文参照)。

(102) C.㊦引用文㊧①P.65や㊧①P.77参照。〈キマイラ〉は同P.P.83-84参照。

(103) C.㊦引用文㊧①P.P.77-78参照。

(104) 〈作為観念〉また〈外来観念〉についてはC.㊦引用文㊧①P.65参照。なお㊧①には「日常的用法」における両〈観念〉も含まれているといえる。なおまた〈imager〉は〈外来観念〉を生じさせるばかりでなく、本稿引用文㊧④にある通り、〈思惟〉としての〈想像する〉もみられるのであって、これが「時間(的経過)」のもとに働きかけることにおいて、〈作為観念〉をもたらし得ると理解しておかねばならない(本文註(103)周辺参照)。

(105) C.㊦引用文㊧②P.6 またP.12参照。

(106) 上記註(98)なかでも「次に」以下を参照。

(107) C.㊦引用文㊧②P.56参照。